

# 日本文の基本的構造

～『ワ』と『ガ』をめぐる～<sup>注1</sup>

原 田 園 子

## (序)

日本文では、動作や状態の主が普通、ガで示されるが、ハによっても示され得る。

1. a. 太郎が行く。  
b. 太郎ワ行く。
2. a. 太郎が若い。  
b. 太郎ワ若い。
3. a. 太郎が静かだ。  
b. 太郎ワ静かだ。
4. a. 太郎が学生だ。  
b. 太郎ワ学生だ。
5. a. 太郎が見える。  
b. 太郎ワ見える。<sup>注2</sup>
6. a. 太郎が好きだ。  
b. 太郎ワ好きだ。<sup>注3</sup>

上記の a, b 両種の文では、どのような意味上・機能上の違いがあるのかを考えてみる。

ワとガの意味上・機能上の働きを検討するのに、ここでは、母国語習得過程を参考とする。幼児が日本語を母国語として習得する過程において、どの様にワとガを使い分けしているのかを調べることによって、両助詞の機能の違いを明らかにしてみたい。まず、幼児はどちらの助詞を先に習得するのか、どのようにして使い分けをしているのか、更に、ワとガの使い分けに混乱があるのか、そして、その混乱があれば、それは何故なのか、からみていく。資料として使うのは、『幼児期の言語生活の実態Ⅰ』と『Ⅱ』（野地 1977, 1973）にみられる、満2歳4カ月末までのスミハレの発話の記録である。

スミハレは1歳8カ月でワを先ず使い始めたが、この段階では、一種の疑問符として、「オトーチャン㊟?」「オトーフ㊟?」の様に、文尾に置いて使っており、文中の語間ではまだ使っていない。1歳11カ月で初めて文中で使った記録がある。一方、ガは、1歳9カ月で使い始め、ごく最初のものは、やはり、「トーチャン㊟」のように、文尾に現われているが、2, 3日経ってから、「パーチャン㊟(オ)クッタ」と、文中で使った発話がみられる(原田 1980)。2歳4カ月末までに、両方の助詞を、正しく頻繁に使うようになっている<sup>注4</sup>ので、この時点で、習得してしまったと、判断できる。従って、この時点を中心としたスミハレのワと

ガに関する使い分け、すなわち彼の言語知識を検討することによって、日本語のワとガの機能、基本的意味上の働きが記述できる。

### (一)

2歳4カ月末までのスミハレのワアリ文と、ガアリ文（ワとガが各々文中で使われている発話）（以下ワ文、ガ文）を検討してみると、ワ文とガ文では、文の性質が異っていることが分る。まず、ガ文は、描写・記述文と判断できる。総てのスミハレの発話の中で、ガ文はワ文の何倍もの数になり<sup>注5</sup>、それらの発せられた状況を読むと、目前で起った、又は、起っている出来事の描写が大変に多い。これは、特に幼児の時代の言語使用の基本的な可能性を、知能発達の段階から考えれば、自分の周りで起った具体的な出来事を認識し、表現するわけだから、描写・記述が多くなるのは、当然と言えよう。その描写・記述文で、動きや状態の主を示す時にガを使っているのである。この点は、スミハレのガの誤用からも判断できる。

7. a. マタカッテネ、ネ。ボク<sup>㊦</sup>にマタカッテネ。

「買って」という動作の主体者としての「僕」を明示するのにガを使ったと思われる。

b. アカチャン<sup>㊦</sup>をツレテイク。

「連れて行く」は、「行く」の意ととり、「行く」主は赤ちゃんであると、マークしている。

c. カジ<sup>㊦</sup>にナル。

「火事」という「ナル」事の主体をマークしている。

d. チンチャンナヨ。カーチャン<sup>㊦</sup>にオコエルヨネ。

受動「怒られる」をまだ習得しておらず「怒る」のは「母ちゃん」だから、動作主としている。

e. ムチ<sup>㊦</sup>にカマエタ。イタイネ。

受動「かまれる」を「かむ」ととり、その行為の主が「虫」であるからガでマークしている。

(原田 1981)

f. 父：はいが来るんじゃないかね。(母に向って)

ハイ<sup>㊦</sup>はコナイヨ。カーチャン ハイ<sup>㊦</sup>はコナイヨ。

「ハイ」は既出事項なので、ワを使うべきところ、スミハレは目前の状況を見て判断し、「来ない」動作主は、「ハイ」であると、表現したと思われる。

以上のようにスミハレはある出来事を描写・記述する時、その動きや状態の主をガでマークしており、ガ文全体は、描写・記述になっている。

一方、ワ文は、説明文になっている。スミハレのワがガと置換出来得のものをとりあげ、何故ガを使わないで、ワを使っているのかを、発話時の状況説明文を参考にし検討すると、ワ文では、内容的に何か一事項をトリアゲ、その説明をしていると考えられる。以下は、スミハレのワ文とガ文で述部が同じか、同類のものをとり出して比べたものである。<sup>注6</sup>

#### ガ文

8. a. エントチュ<sup>㊦</sup>。エントチュ<sup>㊦</sup>アル。

b. アノバチュワトーチャン<sup>㊦</sup>ノッタネ。

#### ワ文

a'. アブラ<sup>㊦</sup>ドコニアル?

b'. トーチャンボク<sup>㊦</sup>バチュノルノヨ。

- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| c. パチュノオジチャン㊦ハッチャーユーター。 | c'. カラチュ㊦カーカーユータクンヨ。 |
| d. アカチャン㊦チャムイ。          | d'. コチラ㊦チャムーナイ。      |
| e. チェンバー㊦ナイ。            | e'. プンプ㊦ナイネー。        |
| f. ミチ㊦ワルイ。              | f'. ココ㊦タカイネー。        |
| g. コレ㊦マクラヨ。             | g'. コンド㊦カーチャン。       |

8 a の、目の景色の描写に対し、8 a' は油のある場所を尋ねており、“油のある場所”についての説明を求めていると、とれる。8 b は、走ってくるバスを見ての発話であり、そのバスについては、以前父親が乗ったことを覚えていて、その“乗車の場面”を記述している。8 b' は、“これから自分がすること”についての説明である。8 c では、バスが通り過ぎる音を聞いて、このような場面があったと描写しているのに対し、8 c' では、絵本の鳥を指して、その鳴き方の説明をしている。8 d は、赤ちゃんのクシャミをした時の発話で、目の場面の記述。8 d' は、単なる、場所（こちら）についての説明。もし、「コチラ㊦チャムーナイ」になれば、場所の（気温に関する）記述になり、場所を強調することになる。8 e は、ビスケットをほうり投げてから言ったもので、それが見えなくなった場面の描写。8 e' は、水たまりがあるはずだと期待して行ったのに無かった時の発話で、自分の頭の中にあった事柄をとりあげ、「無い」と説明している。8 f は、散歩中の場面の描写。8 f' は、積木をつみあげて、てっぺんを指しての発話で、その部分の性質の説明。8 g は、包み紙を枕にみたてており、「これを、自分が枕にしている」という場面の描写。「コレ㊦マクラヨ」になれば、単なる「コレ」というものの説明になる。8 g' は、次の番の人は、誰であるか、の説明である。

以上のようにワ文のワ文素をとった残りの部分は、ワ文素に関しての何らかの説明をしているか、又は、疑問文であれば、ワ文素についての説明を求めている文になっている。あるものについて、その説明をする時、又は説明を求めるとき、そのものをワで示し、説明することの題目・主題であると、マークしているとみられる。スミハレが、助詞をよく使い始めたのは、1歳8カ月の頃からで、当時の文は一語にネ・ヤ・ヨの文尾に置く助詞をつけたもので、その助詞の一つとして疑問文にワを多く使っている。（原田 1980）「誰々ワ?」「何々ワ?」といった文で、これらは明らかに「誰々はどうした?」とか「何々はどこか?」の意で、「誰々」「何々」についての説明を求めている表現である。このことから、ワがそれらについて説明する、又は、その説明を要求する題目を示すのに使っていることが分る。

限られたデータからではあるが、スミハレは、説明文の題目・主題の導入にワを使い、描写・記述文の、動作・状態の主を示すのにガを使っていると判断できる。

ワ、ガ両助詞の混乱に関しては、ワにすべきところでガを使った一例しか無く、更に、その誤りにも、62頁で説明した様に、スミハレのガ使用に関する規則が働いているようなので、使い分けに大きな混乱は無いとみられる。

以上の様な、スミハレのワとガの使い分け一言語知識一から、この二つの助詞の日本語における働き・意味を整理してみると、以下の様になる。

## (二)

日本語では、所謂主語抜きの話も文とみなされる。

9. a. 行く。 見える。  
b. 若い。 高い。  
c. 丈夫だ。 静かだ。  
d. 学生だ。 好きだ。

従って、文の中心が述部にあると考えることができる。述部は、「～をする／した。」「～の状態である／あった。」という内容である。この述部の核は、日本語では四種類ある。

10. a. 動詞述部  
b. 形容詞述部  
c. 形容動詞述部  
d. 名詞述部

各々の述部の主が「何」であるかを示す時、ガでマークする。

11. a. 太郎が行く。 a'. 太郎が見える。 a''. 山が見える。  
b. 太郎が若い。 山が高い。  
c. 太郎が丈夫だ。 山が静かだ。  
d. 太郎が学生だ。 d'. 太郎が好きだ。 d''. 山が好きだ。

これらは、描写、記述文であり、ガでマークされた語句が主語になる。但、必ずしも動作主とは限らない。状態の主である場合もある。例えば、11 a' と 11 d' は、あいまい文で、解釈が二通りある。

11. a'. ①  太郎 見える  
(動作主) (対象)  
② 太郎  見える  
(動作主) (対象)

11 a' ①は、「誰か」にとって見える状態にあるのが太郎である。それに対し、②は、太郎にとって見える状態に「何か」がある、の意である。つまり①の意ではガでマークされる「太郎」は、動作主ではなく、誰かにとって「見える」状態にある主である。

11. d'. ①  太郎 好きだ  
(「好く、」の動作主) (対象)  
② 太郎  好きだ  
(「好く、」の動作主) (対象)

11 d' ①は、誰かが太郎を好いており、②は、太郎が誰かを好いている、の意である。従って、

④の意では、ガでマークされる「太郎」は、「好きだ」に含まれる「好く」の動作主では無く、誰かにとって「好ましい」状態にある主である。

ガでマークされた語句を主部とよぶ。主部は、述部の動作や状態の主が、誰／何であるかを表わし、文全体では、誰々／何々の状態・動作を述べる描写・記述文になっている。

ワによって提示される語句、ワ文素は、ガ文素、すなわち主部抜きで、述部と結びつくことができる。

12. a. 太郎は行く。 a'. 太郎は見える。 a". 山は見える。

b. 太郎は若い。 山は高い。  
(あいまい文)<sup>注7</sup>

c. 太郎は丈夫だ。 山は静かだ。

d. 太郎は学生だ。 d'. 太郎は好きだ。 d". 山は好きだ。

(あいまい文)<sup>注8</sup>

12の各文のワ文素は、話し手と聞き手が共に了解している時は、普通省略できる。

13. a. 行く。 a'. 見える。 a". 見える。

b. 若い。 高い。

c. 丈夫だ。 静かだ。

d. 学生だ。 d'. 好きだ。 d". 好きだ。

13は、9と同じである。しかし、表現された語句が同じであっても、各々の文の内容的質は、異っている。聞き手が、語られた動作・状態、すなわち述部の主を尋ねる時、「誰が?」/「何が?」と問い、「誰ワ?」/「何ワ?」とは普通言わない。このことから、動作又は、状態の主はガでマークされることが明らかであり、あくまでも9は、ガ文素がすなわち主語が、13はワ文素が省略された文である。

それでは、ワ文素の働きは何であるかということになるが、一般に、ワでマークされた語句で発話が始めると、聞き手は、その語句で示された内容について、「どうなのか/何なのか」を期待する。<sup>注9</sup>つまり、ワ文の述部は、ワ文素の内容の説明になる。従って、ワは、それについて語られる説明文の導入としての題目・主題を示す働きをもっていると言える。

ここで、ワの意味上の働きについて、もう少し考えてみる。ある場面で、既に語られている事柄や、了解されている事柄を話題とする時、ワでマークするが、ワは対比・対照を示す場合もある。「～ワ」という表現には、「別の～に対して」という対立の意味が含蓄されるのである。これらの了解事項や、対立する複数の事項から一つの事柄を題目として選ぶという意味で、ワはトリタテの働きをしている(大久保 1976)と言われている。しかし、常に上記の意のトリタテの働きがあるとも言えない。例えば、「英語は好きだ」という表現では、「英語」はある場面で了解事項かもしれないし、又は、学習科目が話題になっている場面では、他の科目一数学・歴史等の中から、選んだわけだから、対立を示すと言える。しかし、例えば、ある人が、突然「地球は広い」と言った場合、「地球」は了解事項とも、何か対立するものと考えての表現とも思えない。この場合、話者は、題目として、何も無いことから「地球」を挙げているのである。題目・主題として一つの事項を、トリアゲているのである。トリアゲは、題目・主題を挙げるという意で先の「既出の事柄や了解事項について語る時のワ」「対立するものの中から

ら一事項を選ぶ時の「ワ」をも含むように思う。「ワ」は、対立するものがあるが無かろうが、又は、既出のものであろうが、無かろうが、更に了解事項であってもなくても、話者が語ろうとすることの題目・主題を選ぶという意で、トリアゲの働きをすると考えられる。つまりトリアゲは、トリタテも含むのである。「ワ」は、話者の話の題目・主題をトリアゲて、マークする働きがあるのである。

### (三)

以上の事を、再びスミハレの2歳4カ月のワ文で検討・確認する。

14. a. ボクサンリンシャニアブラツケタゲル。  
アブラチュケテ、ココモ ココモチュケテネ。  
アブラ⑦ドコニアル？
- b. セージチャン⑦ タベタ？  
(夕食時、御飯を食べながら)<sup>注10</sup>。
- c. ヨコガワイキ。コンド⑦カーチャン。チョキン チョキン チョキン。  
(三輪車に乗って切符を切って、先ず一人言をし、ついで父に向って言った後)。
- d. トーチャン⑦？  
母：父ちゃんはもう学校へ行ったよ。  
ボクサンジニナツタラ、ガッコーイクンヨ ヒトリデ。  
(朝、目をさまして)。
- e. ココ⑦ネ ココ⑦ネ フクレタンヨ。  
(自分の左手の蚊にかまれたあとを指して)。
- f. ボク⑦ネコロンドンヨ。  
チガデタンヨ。  
ステントコロンドンヨ。  
(以前にころんだ時のことを、自分で話題にとりあげて、できるだけ母の関心をよぶように話したいというふうが見える)。
- g. セイジクン⑦ネンネ？  
母：ねんねよ。  
オッキシタラアソボーネ。  
(朝、起床して)。
- h. ボク⑦ユーベ チッコシタ。  
(夜、母がふとんに敷布をかけていると)。
- i. 母：バスか見てごらん。  
アレ⑦チガウ。パチュチガウ。ジープ。  
(バスらしい音がしたので)。

j. アノムチ㊦ネ コワクナイヨ。

(夜、かやの上にくるはえを見ていて)。

k. アノネ フクヤノ ボール㊦ネ プツントキレテ ナクナタント。

(夜、父といる時)。

14 a は、既出事項をマークしている。従って、トリアゲ。

b は、自分との対比としての題目。トリアゲ。

c も、父の番との対比としての題目、トリアゲ。

d は、母との対比、又は何も無いところから挙げたもの。いづれにせよトリアゲ。

e と f は、突然思いついての発言らしく、話題として挙げた、トリアゲ。

g は、自分との対比か、思いついて挙げた、トリアゲ。

h は、思いついて挙げたトリアゲ。

i は、母の発話に、聞こえた音を指す「あれ」が含蓄されているので、了解、又は既出事項である。従ってトリアゲ。

j は、自分が見ているはえを、他の人も見えていると思つての了解事項。

k は、突然話題に挙げたもので、トリアゲ。

以上のように、少例ではあるが、2歳4カ月のワ文12文のうち11文が、上記のように、トリアゲとしてワを使っていると判断できる。残りの1文は、62頁に挙げた7 f の例であるが、これは先に誤用としたもので、つまり既出事項なのに、ワではなくガを使っているのである。<sup>注11</sup>では、この時点でスミハレは、既出事項はワでマークするという規則を完全に習得していないのか、という問題が残るが、14 a, i では正しく使っており、又、2歳3カ月でも正しく使っている。

15. バチュ㊦キタヨ。アノバチュ㊦トーチャンガノッタネ。

16. 母：早く持って来なさい。

ハヤク㊦ナイヨー。

15は、問題なく正用で、16では、文そのものが正しいとは言えないが、既出の「早く」をワでマークしているので、規則の正しい応用と言える。従って、7 f の例は、単に、既に述べたように、ガの機能一動作・状態の主をマークする一を、充分に知った上で、目前の「来ない」主を明示したいという、自分の発言の強化のために、使ったと受け取るべきものである。

### (まとめ)

ワの機能上の意味が確認されたので、ワ文素の文構造における位置を、みてみると、日本語は、基文と、その枠を越えたワ文素で構成され得ると言える。基文は、述部の核が中心になり、ガ文素と、その他の文素で構成される。基文のほとんどの文素がワでマークされ、基文の枠を越えて、文頭にくることができる。

17. a. 太郎が学校へ行く。

b. 太郎は学校へ行く。

- c. 学校へは太郎が行く。
- d. 学校へ行くのは太郎だ。

以上のことから、最後に日本語の基本的な文の構造と内容を、まとめてみると以下のようになる。

日本語では文は、表現形式上、述部だけでも成立する。述部にガ文素が加わると、それが主部になり、ガでマークされる語句が形式構造上の主語である。主部と述部で基文の枠を成すと考え。基文は内容的に記述、描写文である。更に、基文の枠を越えて、ワ文素が文頭にくることができ、ワによってマークされた語句は、題目・主題であり、文全体は、内容的に説明文である。

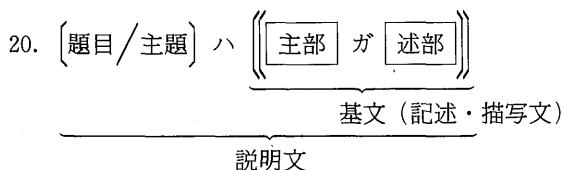
ワ文素は、基文の枠外のものであるから、ワ文には、主語が含まれることも、抜けることもある。

- 18. a. 太郎は花子が好きだ。
- b. 太郎は若い。

18 a の基文は、「花子が好きだ」で、主語がある。18 b の基文は、「若い」であって、主語が無い。又、ワ文素には、元々基文に無いものも置くことができる。

- 19. a. それは太郎が見た。
- b. 花子は太郎が好きだ。

19 a では、「それ」は構造的に基文の「太郎がそれを見た」からトリアゲられたとすることもできるが、一方了解事項であって、基文外からトリアゲられたとも考えられる。19 b では、「花子」は、基文には元々無く、題目として話者が基文外からトリアゲたとしかできない。この点からも、ワ文素は、文構造上、基文の枠内に入らないものと考えられ、日本文は、下記の構造をもっていると思われる。



#### 注

1. 本論は、1982年1月13日、神戸女学院大学研究所専門部会で口頭で発表のものを再考、加筆したものである。
2. 5 a b 共あいまい文で、「何／誰かが太郎には見える」「太郎が誰かには見える」の二通りの解釈ができる。
3. 6 a b 共、やはりあいまい文で、「何／誰かを太郎が好いている」「誰かが太郎を好いている」の二通りの解釈ができる。
4. 勿論、この年齢でも、ワとガ、どちらかが必要な文から脱落している発話も多く見られ、実際ワナシ文・ガナシ文の方が多いのだが、これらの脱落に関しては、日本語での自然な、助詞省略と判断できる場合が多く、又、特に、スミハレのガ省略には、一定の規則がある（原田 1981）ので、この段階で、一応習得と判断する。



5. 例えば2歳4カ月では、ワアリ文が11文に対し、ガアリ文は、90文位ある。
6. 原田(1981)の例を、再考し、加筆したものである。
7. 注2参照。
8. 注3参照。
9. ガでマークされた語句で発話が始まると、聞き手は、その語句で示された人／物が“どうしたのか／何をしたのか”を期待する。
10. 以下( )の中の状況の説明は野地(1973)に記載されているものである。
11. この誤りの理由は、62頁で述べた。

#### 参考文献

- Alfonso, Anthony. 1966. *Japanese Language Patterns*. Sophia Univesity.
- Harada, Sonoko. 1973. "A Discussion on Japanese Subject and Object Markers." *Kobe College Studies*. Vol. XX No. 2.
- \_\_\_\_\_. 1980. "A Study of the Occurrence of *Ga* and *Wa* in the Stage of Two-Word Utterances." 神戸女学院大学論集, 第26巻, 第3号.
- \_\_\_\_\_. 1981. "A Study of the Child Acquisition of *GA* and *WA* in the Stage of Multi-Word Utterances." 神戸女学院大学論集, 第28巻, 第1号.
- 野地潤家. 1973. 『幼児期の言語生活の実態Ⅱ』文化評論社。
- \_\_\_\_\_. 1977. 『幼児期の言語生活の実態Ⅰ』文化評論社。
- 尾上圭介. 1977. 「提題論の遺産」『言語』Vol. 6, No. 6.
- \_\_\_\_\_. 1979. 「助詞『は』研究史に於ける意味と文法」『三十周年記念論集』神戸大学文学部。
- \_\_\_\_\_. 1981. 「『象は鼻が長い』と『ぼくはウナギだ』」『言語』Vol. 10, No. 2.
- 大久保忠利. 1976. 「日本語文法主語論の建設」『言語』。

原稿受理 1985年4月17日